

## 原著論文

### 小説の読みと第三項の原理

#### Reading of a novel, and the meaning of the third clause

鈴木 正和<sup>1)</sup>

Masakazu Suzuki

キーワード: 日本近代小説、テキスト概念、主観と客観、第三項、語りと認識、

Keywords : Japanese modern novel / Text concept / Subjectivity and the object /  
The third clause / Narration and recognition /

#### 1、文学作品の読みには正解はない

文学作品の読みや解釈には正解はない。実体もない。まずこのことを基本的な前提として、主張しておきたい。なぜならば、私自身、学問や研究には客観的な真実があり、たとえそれが文学作品や小説を対象としていたとしても、客観的な、あるいは自分なりの正しい解釈を小説の文章からは導き出せる筈だと思ひ込み、どこかでそれを信じて、作品分析を実践して来た過去の経緯があるからである。

研究とは、客観的な真実と正解を導き出すことである。そのことを否定するならば、何のために文学や小説について学ぶのか。正解がないところに文学研究や国語教育は成り立つのか。そうした疑問が生じてくるかもしれない。しかし文学作品の解釈には誰もが認め得る正解がないことを一先ず理解しなければ、小説という言葉による文化の本質も、その原理的な価値の解明も明らかにすることが出来ないというのが、現在の私が辿り着いた結論である。そこでまず初めに、文学作品を読むことには唯一の正解はないことを理解することが、なぜ重要なのかを述べておきたい。

文学の実体(正解)はどこにあるのかという議論は、文学作品を読むということの意味と価値をめぐって、長年に亘って議論され続けて来た事柄である(田近洵一『増補版 戦後国語教育史』大修館書店、一九九九・五 所収の「主観主義と客観主義」論争—読みの主体性と科学性への視点」に詳しい経緯が記されている)。

目の前にある文章を冒頭から結末まで読む。一読したのみでは理解できなかった文章が、再読を繰り返していくに従って個々に理解が深まり、読み手の中には徐々にその作品の像が明確になって来る。そうした誰もが体験して来た読むことの体験は、やがては作品の中にある一つの読みの正解へと読み手を導き、その正解は誰もが等しく読み取れる客観的な正解へと辿り着ける筈

---

<sup>1)</sup> 山陽学園短期大学幼児教育学科 : Department of Pre-Elementary Education, Sanyo Gakuen College

であるとの思いが、文学研究や国語教育の基本には存在していたことも確かである。

その模索の過程で、「正解主義」の立場は客体としての文学の側に読みの正解があることを求め、「正解主義批判」の立場は個々の読み手の主体の側に正解があると考えてきた。また、三好行雄や越智治雄を嚆矢とする従来の「作品論」は、自己の読みは〈恣意〉であることを自覚しながらも、丹念に読みの実践を積み重ねていき、それを作家や史的な資料とも接続することで、作品の客観的な読みの正解に辿り着くことを夢見てきた。つまりは、文学研究の解釈と読みの前提には、どこかにその作品の実体や正解があることを疑わず、正解を読むこと、実体を見ることが出来る筈であるとの信念や思い込みの元に、研究や解釈の実践が試みられ続けて来たといえよう。

また、個別の作品の研究に即して言えば、優れた作品論や解釈の読みの成果は私たちの財産として現在も蓄積され続けている。時に斬新な解釈が提示され、時に既成の読みの通念を更新するような刺激のある新たな解釈が生まれている。読みを深め、新たな作品観を齎す作品論の成果は、文学に対する新たな思考を促していく。その読みの成果は、ある作品に対する理解を深めることにおいて、常に敬意を払うべき価値ある研究上の財産であると考え。従って本稿で述べたいことは、個別の文学作品の解釈の結果それ自体の是非を問うことではない。文学の本質と読むことの原理を考え、文学作品の価値を見出したいがために、読みや解釈の結果には実体(正解)がないことの理解を通過する必要があるということなのである。

繰り返すが、文学作品の解釈には、唯一絶対の正解はない。そのことに気付かされる契機を齎したのが、フランスのロラン・バルトが提示した「テキスト」という概念であった。バルトは、文学批評にポストモダンの到来を告げる革新的なエッセイ「作者の死」を発表し、「「作者」が遠ざけられると、テキストを《解読する》という意図はまったく無用になる」「多元的なエクリチュールにあっては、すべては解きほぐすべきであって、解読するものは何もない」と述べ、「作品からテキストへ」というエッセイでは、「還元不可能な複数性」という概念を提示し、次のように言及している。

「テキスト」は複数的である。ということは、単に「テキスト」がいくつもの意味をもつということではなく、意味の複数性そのものを実現するということである。それは「還元不可能な複数性」である(ただ単に「<sup>アクセプタブル</sup>容認可能な複数性」ではない)。「テキスト」は意味の共存ではない。それは通過であり、横断である。したがって「テキスト」は、たとえ自由な解釈であっても解釈に属することはありえず、爆発に、散布に属する。実際、「テキスト」の複数性は、内容の曖昧さに由来するものではなく、「テキスト」を織りなしている記号表現の、立体的複数性とでも呼べるものに由来するのだ(語源的に、テキストとは織物のことである)。(ロラン・バルト『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房、一九七九・十一)

バルトのテキスト概念が日本の文学研究や批評の場に衝撃を与えたのは、文学の実体はどこにあるのか?というそれまでの問いを無化し、文学を読むことには実体や正解は何も無いのだとする発想へと、文学の原理そのものを覆してしまったところにある。

「自由な解釈」であっても、「解釈」に属さないのが「テキスト」である。並列する複数の読みの成果に実体を求める「容認可能な複数性」か、否か以前に、文学とは、どこにも「還元」することが「不可能」なもの、解釈することの根拠が無いもの、実体(正解)という起源に戻ることが出来ないものとされ、それを「テキスト」と呼ぶことで、バルトは文学の概念に根本的な修正を施したのである。

勿論、現在となれば、バルトは一つのきっかけに過ぎない。なぜならば、文学は読まれなければ自己の内部に現象しないものであることは、文学作品を読む体験を経たものであれば、誰もが気づいてもおかしくはない事柄であるからだ。読みは自らの意識に現象するものであり、客体としての文学作品に一義の解釈の正解を見出すことが出来る根拠は、どこにもない筈である。幾ら精緻な読みを積み重ねた所で、誰もが認め得る読みの正解(実体)には、永遠に辿り着くことは出来ないのである。

そうであればこそ、バルト以降、一九八〇年代以降のポストモダンの状況を通じた後には、解釈が学問の客観性を確保できないことを自覚した者は、研究上においては解釈することを放棄し、文化研究、カルチュラル・スタディーズ、イデオロギー批評、ポストコロニアル批評、文化記号論、フェミニズム批評等に研究の活路を見出し、教室においては精緻な読解を追求する文学教育を否定する見解が現れて来るのは必然であった。

またバルトの「作者の死」という概念は、本来は西洋の(神学論争)の問題を提示していた筈だが、それが日本に移入された後には、作品を作家の概念と切り離すことで「物語の構造分析」を実践することが「テキスト論」だとされもし、西洋の幾多の文学理論が翻訳され移入されたことと重なって、バルトの「テキスト」概念は日本では誤解されて受容されて来た側面があるように見受けられる。

作家の伝記的な事実の痕跡から自立した、作品の言葉のみを対象とする解釈を「テキスト論」として展開したとしても、自己の解釈を正当化し、正解を求める読みの成果を競い合うならば、それは文学を「容認可能な複数性」と捉える従来の文学観の枠組みを超え出てはいないと思われる。実体を求めたままで、作家の概念と切断した読みを「テキスト論」とするならば、自己の読みを(虚像)だと自覚しながらも、対象とする作品には(実像)(=客観的な正解)があることを夢想して来た「作品論」との隔たりは、然程は遠くないことになる。(作家の概念と作品を切り離れた解釈の試みは、一九七〇年代以前のニュークリティシズムの方法意識に既に見られるものであった。)

一九八〇年代を経たポストモダン以降の日本の文学をめぐる状況は、多種多様な方法論が展開され、豊かさを増したかのようにも見えた。だがその実は、ポストモダン以前(文学を実体の反映論で捉える思考)と以後(文学に実体はないとし、テキストを差異や関係論で捉える思考)とでは文学に対する理解は分断されたままに、根本的な問いとなる筈の文学の本質はどこにあるのか? という議論の行方そのものは置き去りにされてしまったといえる。

バルトの「テキスト」概念が重要であったのは、読み手の主体にも、客体の文章にも、正解(実体)は見出すことが出来ずに、どこにも「還元」することが出来ない文学に対して、解釈は無用、解読するものは何もないとしたことにあった。そうだとすれば、無前提に読みの正解を求め続けてきた文学研究は、バルトの「テキスト」概念にどう向き合うことが出来るのかを根底から考え直す必要があった。バルトのいう「生命の《尊重》は、『テキスト』にとってまったく不要である」という提言を受け入れることが出来ない読み手が、それでも文学に「生命」を求め、解釈することを実践していくためには、文学をどう考えればそれが可能となるのか、そのこと自体を問い直すことが、現在も研究の根底では求められているのではないかと思われる。

そして、それを追求するためには、文学を読むことを考えるためのベクトル(方向)を、一八〇度転換させる意識の変革が必要であろう。読みの到達点には、客観的な正解を見出すことは出来ないし、文字の向こう側に実体を見ることも出来ないことが、まず自覚される必要がある。その難問

を抱えることで、初めて従来の「主観」と「客観」の思考の枠組みを捉えなおす考え方に行き着くのだと思われる。

読むことの向こう側に、文学の実体(正解)はないし、仮にあったとしても、それは肉眼で捉えることは永遠に出来ないものである。主体が客体の文章を読み、いかに精緻な分析を施し、読みの結論を導いたとしても、客体の文章は読み手の主体の意識からは完全には断ち切ることは出来ない。従来の「客観」という思考の枠組みは、実は「主観」に取り込まれた「客観」でしかない。文学の客体そのものは、個人が捉えることが出来ないその向こう側に想定する以外にないのである。読みの結果は、限りなく自己化作用に取り込まれている。全ての読みは恣意であり、レベルの差はあっても誤読の中にあり、正解に辿り着こうとするならば、自己矛盾に陥るのが文学の読みの結果の着地点だったのである。

そうであるならば、唯一の客観的な読みの正解があることを信じる意識の枠組みは、誰もが認める読みの正解はないことを前提にする意識へと移行される必要があり、一義の正解があると考える思考の枠組みそれ自体が、まずは壊されなければならない。そして、その思考の枠組みが倒壊されたならば、次に問題となるのは、文学作品の読みを促す作品そのものの源泉と力学の正体とはどのようなものなのか、という課題である。たとえ個々人の解釈の結論は異なっても、個々の読み手に解釈を促し、読み手に固有の〈感動〉を齎す文学の力学の源泉が問題となってくる。なぜ文学作品は解釈することが出来るのか、複数の読みの成果を集積することで、読みの一義に向うのではなく、個々人に読むことを可能とする文学のメカニズムの源泉を探求していく方向へと、研究対象のベクトルは転換される必要がある。

個々に文学の読みを現象させるものの正体を、客観的な実体(正解)として求めるのではなく、「主観」と「客観」の二元論では解決できない問題として探求することで、永遠に捉えられない客体そのもの(第三項)について考察することが要請されていることに思いを致したい。(文学研究における「第三項」の問題に関しては、田中実による「〈原文〉という第三項—プレ〈本文〉を求めて」／『文学の力×教材の力 理論編』教育出版、二〇〇一・六 等の一連の仕事がある。また、『国文学解釈と鑑賞』至文堂 では、「〈原文〉と〈語り〉をめぐって—文学作品を読む」二〇〇八・七、「〈原文〉と〈語り〉をめぐってⅡ—ポスト・ポストモダンの課題」二〇一一・七 の特集が組まれている。)

## 2、客体そのものという「第三項」を考察することの意味

文学の読みは読み手の内部に現象するものであり、その結果は恣意であり、誤読であり、虚偽である。作品に一義の客観的な正解を求めることは幻でしかない。主体にも、客体にも、実体としての正解は見出すことが出来ない。通常、客観と呼ばれる読みの成果も、実際には主体が捉えた主観的な読みの現象の枠内にある。仮に自己の読みの結果に多数の共感を得られたとしても、それはある共同体の意識や枠組みに支えられたものである。しかしそれでも、読むことを通じて文学は読み手の内部に確かに現象し、それが人に〈感動〉を齎し続けて来た事実は拭い去ることが出来ない。文学が生き延びてきた理由も、読み手の〈感動〉の内にその秘密がある。

そうだとすれば、文学の根源には読み手に解釈することを促し、固有の読みを現象させようとする力学の源が、主体(第一項)と主体が捉えた客体(第二項)の向こう側(第三項)に潜んでいることを想定することが出来る。

つまり、誰がどう読んでも読みの結果は誤読と恣意を免れないが、読者に向かってその読みを促す力学の源泉はある筈であり、その源泉にこそ文学の真実と価値があると考えるのである。それは、主体(読み手)と主体が捉えた客体(作品)がなければ、仮設できないものであり、両者が互いに衝突して、初めてハレーションを起こすための起爆剤のようなものだと考えている。

客体の文章の客観性は確定できないが、そこには主体の目では捉えられない文学の働きの源泉が隠されている。それは肉眼では捉えることは出来ないが、そこから湧き起こる文学の力学が読み手の意識に働きかけ、その結果、読み手固有の文脈が現象することの仕組みを理解することが必要とされて来るのである。

ところで、主体(第一項)と客体(第二項)の向こう側に想定される客体そのもの(第三項)が、一人ひとりの読者に向かって個別の読みの現象を促すメカニズムを考察することを提言しているのが、田中実の「〈原文〉という第三項」の概念である。〈原文〉に関する考え方を、私なりの理解で整理し直してみると、次のようになる。

私たち読者が、ある特定の文学作品の文章を読む際には、そこに記されているのは文字というインクの形跡が羅列してあるだけのものであり、未だそこには何ら意味や解釈は発動していない。バルトのいう「物質の断片」があるのみである。その読まれる以前の文字の集積を〈元の文章〉と呼ぶ。しかし、読み手がその文字を読み進めていくと、読み手の中には何らかの意味の文脈が現象し始める。その現象した文脈は〈本文〉と名付けられる。〈本文〉は、読み手の感受性や思想、経験や価値判断等のフィルターを通して読み手の内部に現象するものであるから、当然、その〈本文〉は読み手固有のものとなる。ある一人の読み手においてさえも、現象する〈本文〉は絶えず変容を繰り返し、読みの動的過程を辿っていくことになる。

また〈本文〉は、あくまで読み手の「私」の中に現象したものであるから、それは「わたしのなか」に現れた「他者」として定義される。この場合の「他者」という語の概念は、人間一般に限定されるものではなく、「わたし」が読み取り、認識した全ての物事や事象を比喩的に「他者」としている概念であると思われる。

〈元の文章〉は、読まれた後には、「わたしのなか」の〈本文〉と化して現象してしまうため、読まれた後の〈本文〉は、もはや唯一の正解としてはどこにも還元することが出来なくなっている。主体(読み手)の中に現われた客体の〈本文〉の向こう側に、主体と客体の二項の枠組みを超えた「第三項」としての〈原文〉の存在を想定することが必要とされてくる所以である。

加えて、〈原文〉は読み手の意識に現象する〈本文〉以前の何かであり、知覚に働く以前の源泉であるために、「プレ〈本文〉」とも命名されている。読み手が〈元の文章〉を読んでいくと、「〈原文〉の影」＝「プレ〈本文〉」が読み手の知覚に働きを促し、読み手の内部には「わたしのなか」の〈本文〉が生成する。文学作品を読む行為とは、その生成する〈本文〉を個々の読み手が捉え直し、〈本文〉の分析や理解の手続きを獲得していく過程のことを指している。

例えば、初読の時に現象した〈本文①〉は、さらに再読を繰り返すならば、「〈原文〉の影」の働きによって、新たな〈本文②〉が読み手に現象する可能性がある。これは、自己のフィルターを通して現象した初発の〈本文①〉に、未だ「私」の認識の外にあった「〈原文〉の影」が新たな作用を促したことで、先に現象した〈本文①〉が自己倒壊を起こし、〈本文②〉が新たに「わたしのなか」に生成されたことを意味している。「〈原文〉の影」は目に見えない働きであるため、認識された自己の解

積の結果は、何度でも自己倒壊を起こす可能性があり、新たな〈本文〉が現象する可能性を有している。

さらに〈原文〉は、「神」や「絶対」という語に置き換えられることがあり、自己の認識の埒外に想定される概念であるが、揺るぎない実体性のあるものとして考えられ、それは目に見えない宇宙や生命の法則のようなものだと個人的には考えている(注1)。

従って、「〈原文〉の影」が読み手に働きかける摩擦が強ければ強いほど、自己の認識の枠組みが倒壊する衝撃も強くなり、その落差を通じて、読み手の〈感動〉の度合いも大きくなる。勿論、その衝撃や度合いは、その作品固有の〈原文〉の働きと、個々の読み手の世界観や感受性との相互作用が生じさせるものであり、個々に生成する〈本文〉は異なるものとなる。

あるいは〈原文〉は、直接は読み手に知覚できないものであるため、「了解不能の《他者》」とも命名されているが、「〈原文〉の影」が読み手のフィルターに働きを促す時には、それは未だ読み手の認識の外にあり、絶えず読み手の認識の枠組みは倒壊させられる可能性がある。

従って、この〈原文〉という「第三項」の概念を理解することで、作品の読みの意識の過程を辿ってみるならば、文学の読みは決して固定化されるものではなく、絶えず自己倒壊と生成を繰り返す可能性に満ちていることになる。

そうだとすれば、従来の読みの研究(作品論)は、自己が認識した作品の像を実体化し、個々の解釈の結論の正しさを提示することに力点が置かれていたと思われるが、知覚以前の文学のメカニズムを意識化することに、その力点は置き直される必要がある。つまりは読み手自身が作品の言葉を読み、分析を施しながらも、そこに立ち現れる〈本文〉が自己の内部に現象していることを自覚し、そのように〈本文〉を現象させる自分自身をも問い直すことに、読みの意識の矛先が向かっていくことが求められるということになる。

### 3. 「第三項」と〈語り〉の関係

では、読み手の主体と客体の文章の向う側に「第三項」の概念を仮設することと、小説を読む際に〈語り〉を意識化することとの間には、どのような関係があるのだろうか。読むことにおける「第三項」の理屈は理解出来たとしても、なぜ〈語り〉を読むことが問題となってくるのか。そのことを次に考えてみたい。

その際に注意しておきたいのは、〈語り〉を読むことを方法上の正しさとして理解するならば、「第三項」の概念もまた実体化され、主体と客体の側に正解を求めることになってしまうという矛盾に陥ってしまうということである。あくまでも主体と客体の両者を見つめ続け、そこには実体(正解)が読めないことの困難さを自覚していることが、「第三項」と〈語り〉の問題を考える上での前提となる。読むとは何か、認識するとはどういうことか、見るとは何か、見えるとは何か、認識主体と対象を読むことで現象した〈本文〉との関係から目を背けないことが、〈語り〉の問題を考えるためには大切である。そこで、〈語り〉を読むという意識を、一旦は〈語る〉側の視点に立って、捉え直して考察してみたい。

通常では、人が何かを〈語る〉ためには、その語ろうとする事柄や出来事は、始めから十分に認識されているものだと考えられているかもしれない。先に〈語る〉ことが決まっているからこそ、人は物事を〈語る〉ことが出来るものだと思います。勿論、語る内容が製品の説明や報告事項の

伝達であれば、その内容を目で追い、音声化すれば良い。だが、語る内容が特定の人物のことであったり、出来事であったりする場合には、本当にその人物や出来事のことを、人は〈語る〉ことが出来るものなのだろうか。況してや、それがストーリーのある物語を〈語る〉ことであった場合には、〈語る〉ための意識はどのようにになっているのだろうか。

このことを考える際に、「物語があって〈語り〉があるのでは全くありません。語りが記憶(物語)を想起させて叙述が行われているのです」(田中実「読みの背理を解く三つの鍵」・『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇八・七)という指摘は示唆に富むものである。人は決して記憶の中の「物語」をそのままに語る事が出来るわけではない。〈語る〉ことを通じて、初めて「記憶(物語)」は喚起され、叙述は行われていくのである。それは言語があって、人間の認識があるというフェルディナン・ド・ソシュールの言語観に基づいてもいる。そうだとすれば、〈語る〉ことによって、目の前に現われてくる「物語」を、語る者は同時に認識し、読み進めていかなければならない事態に直面していることが分かる。

〈語る〉こと的前提には、自らによって語られ、叙述された物語(対象)を見つめながらも、同時にそれを認識し、その物語を〈読む〉意識が平行して働いている。〈語る〉行為には、それを〈読む〉意識が後追いしている。そうだとすれば、〈語る〉ことは、〈読む〉ことと平行して行われているのだということが出来る。近代作家は、「物語」を創り出していくに際して、当然、それを語るための〈語り〉を意識化しなければ「物語」を語れないため、〈語り〉の問題は、作家自らの認識の問題と重層的に呼応する。

従って、作家が小説の時空間で設定せざるを得ない〈語り手〉もまた、〈語る〉ことのみならず、自らの物語を〈読む〉ことの難問を、叙述の際に同時に抱え込んでいることになる。そのように考えてみるならば、小説内の〈語り手〉が自ら語った叙述を〈読む〉意識は、読者がその小説を〈読む〉意識の問題と重なり合うものだということが理解されてくる。

小説の内部で物語を語る〈語り手〉も、私たち読者も、読むことの前では、主体と客体の側には実体(正解)がないことに等しく直面しているのである。

しかし、そのことは裏を返せば、〈語り手〉が〈語る〉ことの困難さを、読み手の〈読む〉意識に共鳴させることが可能だということでもある。現に語られた物語と、その物語を〈語る〉困難さに直面している〈語り〉の双方を意識化することで、〈語り〉と「第三項」を繋ぐ通路は拓かれていくのだと思われる。

唐突なようだが、ここで「近代小説」と「物語文学」のことに少し触れておきたい。

私見では、「物語文学」とは、ストーリーの内容に重きが置かれ、未だ〈語り手〉の側の認識主体の在りようは疑われてはいないか、あるいはその問題は意図的に排除されている文学の形式である。

しかし、明治維新の文明開化期に、西洋を通じて「自由」や「独立」や「個人」や「愛」といった言葉が移入された後に誕生した「近代小説」では、これらの言葉によって「物語」を語る認識主体の内面が育成されて来たために、見ること、認識すること自体が疑われるようになる。「自由」という言葉は移入されたが、「自由」そのものは容易には目の前に見出すことが出来ない壁にぶつかる。言葉の概念と現実の状態が乖離していることに対して、近代作家の多くは、自らの「物語」を語りつつも、それを言葉で認識することの困難さに直面していた筈である。あるがままの現実とあるべき理想を語ることの間で、肉眼が捉えた自己認識の世界が虚偽であることを自覚した〈語り手〉は、

自らが〈語る〉ことの難問を抱え込まざるを得なくなってしまったのである。

例えば、「近代小説」(森鷗外『舞姫』明治二三年、「国民之友」)において、〈語り手〉(船中の手記の書き手)が、作品内の人物A(主人公・豊太郎)の内面を語っていくと、人物B(客体・エリス)の内面は語る事が出来なくなるというのは、人物A(豊太郎)の眼差しを通して、人物B(エリス)を認識することを語るならば、人物A(豊太郎)の認識主体のフィルターを通した人物B(エリス)の像が現象してしまい、自立した人物B(エリス)の内面を語る事には辿り着けなくなってしまうということである。

その意味で、「近代小説」の語り手が〈語る〉ことの虚偽の問題は、読者が小説を〈読む〉ことの虚偽の問題と、同一の自己認識の問題を抱えていることになる。読み手が〈語り〉を〈読む〉ことが必然であるのは、「近代小説」という形式が、その根底で、主体が客体を認識することの虚偽の問題と困難さを抱え込むことで成立した表現形式であるためである。

さらにもう一つ、芥川龍之介の『羅生門』を例に上げるならば、この作品内で平安朝の「物語」を語るのは、作中で「作者」と記される〈語り手〉である。この〈語り手〉は、人物A(下人)の内面を語っていき、人物A(下人)が見た人物B(老婆)の内面をも語っていき、最後に挫折する。人物A(下人)の捉えた人物B(老婆)の像は、あくまでも失職したばかりの若者の認識の像を出ず、その向こう側で、飢饉や災害に見舞われ、飢えや老いの苦難と闘いながら、極限の生命を生き延びさせて来た人物B(老婆)の真実には、人物A(下人)は思い到ることは出来ない。

この『羅生門』という「近代小説」に対して、〈語り〉を等閑に付し、主人公A(下人)の心情を辿るのみで盗人になる勇気を得た人物A(下人)の解放感を読むに留まるならば、人物A(下人)が見たもの、認識したもの、人物B(老婆)は悪だとする人物A(下人)の認識を、読み手はそのまま真実の正解として読むことになってしまう。

こうした主人公主義の読み方を、主体か客体かで読みの正解を問う先の問題に置き換えてみるならば、客体の人物B(老婆)を悪とする「正解主義」、あるいは主体となる人物A(下人)が解釈した人物B(老婆)の像を正解とする「正解主義批判」のいずれかの枠組みに、読みが回収されてしまうことと同義であることが理解されるだろう。

結局は、主人公の心情のみを読む読み方は、人物A(下人)の認識を読み手の認識と同一化し、人物B(老婆)の悪を実体化して、断罪する方向へと向かってしまうものと思われる。〈語り〉を無視した主人公主義の読み方は、読み手にとっては、自己に現象した認識を増殖させるための読み方になってしまうのである。

ところで、周知の通り、定稿の『羅生門』(『鼻』大正七・七、春陽堂)の末尾は、「下人の行方は、誰も知らない」で終わられている。なぜ〈語り手〉は、改稿の果てに、下人の行方を語れなくなったのか。

それは、自己が認識すること、解釈することの難問を容易に超えることが出来ない地点に、〈語り手〉の自意識が到達したからであると思われる。人物B(老婆)を解釈する人物A(下人)の自意識を〈語る〉ことのみでは、人物B(老婆)の内面には到達できないのである。人物B(老婆)が人物A(下人)に語ったことの内には、人物B(老婆)が語れなかったこともまた含まれる筈である。

そうだとすれば、「近代小説」の読み手に出来ることは、語られた平安朝の「物語」を丁寧に読み進め、分析しながらも、それを語る〈語り手〉が語っていること、同時に、語り得なかったことの双



方を問題としながら、読み手自らの『羅生門』の文脈を掘り下げ、創り上げていくことであろう。

但しこのことは、『羅生門』の解釈の実体(正解)を求めているのではない。『羅生門』という「近代小説」の〈語り手〉自体が、人物A(下人)が人物B(老婆)を解釈することの不可能性(下人は老婆の内面の実体を捉えることができないということ)を問い始めたことを意味している。そこに、人物A(下人)が見たものを超越しようとする〈語り手〉の葛藤と模索、つまりは〈語り手〉が自らの語った「物語」を超越しようとする「近代小説」の力学が働くのだと思われる。それを仮に「第三項」と呼ぶならば、その力学によって、読み手に現象した〈本文〉は倒壊する。仮に初読の〈本文〉が主人公主義で読まれた解釈であるならば、その解釈自体を「第三項」の力学が倒壊させる可能性があるのである。

読み手は、客体の文章にも、主体に現象する〈本文〉にも、正解を読むことは出来ないが、「第三項」の力学によって自己倒壊を起こすことで、文学の〈感動〉に出会う可能性がある。小説の〈語り手〉は、人物Aの捉えた人物Bの認識には実体はなく、それが虚偽であることの難問に直面し、語ることが出来ない背理を抱えながら、自らの〈語り〉を超越しようとして葛藤している。その結果、語り出された「物語」と、語り手の自己認識に基づく表現との間には、生の葛藤や軋轢が生じるものと思われる。その生の葛藤や軋轢は、〈語り手〉が語り得なかったこと、〈語り手〉が認識できていないこと、〈語り手〉によって隠蔽されてしまったこととして、〈語り手〉の認識の向こう側にある。

つまりは、この〈語り手〉の認識の向こう側を問う問題は、読者にとっては、主人公主義の読み方や〈語り手〉のメッセージをそのまま受け取ろうとする読み方では、読み取ることが出来ない領域にある。小説を読むことで自己倒壊が起こる可能性とは、自己認識の虚偽、その難問と向き合いながらも、こうした自己認識を超えたところにある生の領域(第三項)に読み手が衝撃を受け、自らの内部で新たな読みを構築することで齎されるものと思われる。

#### 4. おわりに

〈原文〉という「第三項」という用語は、便宜上、「近代小説」の原理を考えるために創り出された造語である。しかし、その概念自体は、小説や作家の問題に留まらず、この世界を生きる私たち自身が直面している生の問題をも問い直しているように思われる。

では、この「第三項」の問題は、私たちが生きているこの世界と、どのように関わりあっているのだろうか。最後に、この問題について少し触れておきたい。

二〇一一年三月十一日に東日本大震災が起こった後、私個人に想起されたことは、この地震の被害を含めて、この世界で起こる事象の真実、人間の生と死の本質を捉えることが出来ないことに対する空虚さのようなものであった。被災地から遠く離れた場所に住む私自身が目にすることが出来たのは、テレビ等の映像に映し出された震災の全体像の僅か一部でしかなく、その一部でさえも虚像の中でしか捉えられず、その向こう側には膨大な数の死者が存在している。

また、その後も余震が繰り返し起こり、原発の問題が発生しているにも関わらず、いかに映像中の画面を見つめても、私には何も見えてはいないことを痛感させられもした。震災が起こって後、東北や関東の人たちの安否が気遣われ、私にとって、実体が見えないことへの不安は、今更のように、私が見ることが出来るのは、「わたしのなか」の現実(他者)でしかないことを思い知らされていた。

「第三項」の理論は、私に見えるもの、私が認識している世界は、「わたしのなか」の現実(他者)でしかなく、その外側に実体としての現実があるわけではないことを、認識させてくれるものであった。それは、私の認識の外には確固たる実体や正解はないことを同時に認識させてくれもし、しかしその反面で、客観的な実体や正解が自己の外部に見えることを、今でも信じて疑わない人々が多く存在することを認識させられもした。

その意味でも、主観と客観の問題は、現在でも私たちの世界を覆い包んでいる根源的な問題であり、自己と他者の境界が認識されるためにも、認識主体の虚偽、他者の像を「わたしのなか」に取り込んでしまう自意識の問題は、乗り越えられなければならないと考えている。

だが、バルトの提示した「テキスト」の概念は、この一人ひとりが認識している複数の現実(現代作家の村上春樹の言葉では「パラレル・ワールド」)の向こう側には、価値のある場所などどこにもなく、それは単なる物質としての虚無(=死の世界)でしかないことを、文学批評の問題を通じて提示したものであった。

現実には、個々人の中のみ現われ、個々人が認識している複数の世界から成り、個々の認識の外には、実体としての唯一の現実(正解)が存在するわけではない。時間も空間も、個々人が認識した意識の内であり、アルベルト・アインシュタインの「特殊相対性理論」がこの世界の常態である。(現実や他者の像を捉えようとしても、自己の認識の内部に閉じ込められてしまう人間の苦悩の問題を追及した夏目漱石や芥川龍之介等の近代小説は、まさにこの難問と格闘していたといえる。)

だとすれば、自己の固有の生の意味は、どこに見出すことが出来るのだろうか。私たちが捉える認識の向こう側にあるのは、自己の死という虚無の世界だけなのだろうか。この世界に人が生きていることの意味や宇宙の法則はないのだろうか。バルトの思想は、認識される世界の向こう側には膨大な虚無の闇が広がっているだけであり、そこには果たして生の意味などあるのだろうかという問いを、私たちに突きつけるものであった。

「第三項」の理論とは、私が見ることが出来る全ての現象は私が捉えたものに過ぎないが、そこには肉眼では見ることが出来ない客体そのもの(第三項)の影の力学が働いていて、その影が私たちの生を支えているのだという世界観を提示するものであった。その影を見ることは、生と隣り合わせにある死の淵を覗き込み、改めて生の側へと折り返すことで、一人ひとりの固有の生の意味と価値を捉え直そうとすることでもあるが、それは、言語(自己の認識)があって生かされている人間の生の本質を明らかにしようとする考え方でもある。

そして、「近代小説」もまた、死の淵から生の現象を見つめ返すことで成立した新たな文学の形式であると考えている。自己の認識とは何か、自己を超越する世界とは何かを問う試みは、「近代小説」における「第三項」の問題を通じて、まだ始まったばかりなのである。

注1…バルトは、この〈原文〉＝「神」の存在を否定するために、文学(多元的なエクリチュール)を解きほぐすことはするが、解説するものは何もないと主張する。バルトにとって、文学の意味を固定することを拒否することは、「神」の法則を拒否することに通じている。つまり、〈原文〉の存在を認めるか認めないかは、バルトに照らし合わせるならば、宇宙や生命の法則、人間を存在させている「神」の法則の有無を問うことの問題でもある。私たちが言語を通じて認識する世界の向こう側とは何か、自己の認識を超える世界と向き合うことが「テキスト」概念の問題であり、「〈原文〉という第三項」の問題でもある。